『年報人類学研究』第11号（2020）
Annual Papers of the Anthropological Institute Vol.11 (2020)

研究ノート

趣味のコミュニティにおけるつながりの作法

――二次創作を行う腐女子の同人作家を事例として

大戸　朋子 *1　伊藤　泰信 *2

KeyWords

腐女子
二次創作
二次創作コミュニティ
趣味縁

目次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　調査対象およびフィールドワークの概要
　1. 腐女子について
　2. 腐女子に関する先行研究
　3. フィールドワークの概要
Ⅲ　二次創作を行う腐女子の同人作家コミュニティの実践
　1. コミュニティにおけるつながりの特徴
　2. 成果の産出と評価
　3. 二次創作・同人活動と金銭に対する意識
Ⅳ　おわりに

Ⅰ はじめに

近年、情報通信機器の発達により、人々の関係は現実空間や仮想空間に固定されない流動的なものとして形成されている。そして、これまで重なり合うことのなかった様々な差異を持った人々が自身の選択によってつながり合い、コミュニティを形成することが可能になったと同時に、異質な個人がつながり合うことによって様々な衝突が生まれている。このようなコミュニティ内での個人と個人の衝突は、グローバリゼーションの中で今後さらに複雑化・多層化・大規模化していくことが考えられる。そのため、多様な個人が参集する活動の場の形成・維持の方法を考えることが社会課題の１つとなっているといえよう。しかしながら、このような多様な人々によって形成される活動の場において、成員間の異なる属性や非対称性に対して内部でどのように対応すれば、お互いを肯定し合いながらつながり合える人間関係が形成できるのかは問われるべき問いである。

本稿で注目するのは、趣味縁と呼ばれる関係である。趣味縁とは、「趣味によってつながる人間関係のこと」であり（浅野 2011: 38）、「二次的結社の、したがって社会関係資本の典型である」とされている（浅野 2011: 46）。また、趣味縁は（1）社会的「有用性」からの逸脱、（2）加入も脱退も個人の自由意志によって行うことができる「選択縁」であること、（3）所属する社会集団内での既存の役割からの解放（脱役割）と変身が可能であるという特徴を持っているとされる（加藤 2017: 49）。つまり趣味縁とは、趣味という興味関心を同一とする様々な個人が参加し、成員の任意によってつながり合う多様性を持った私的で流動的な人間関係であると言える。

趣味縁と社会参加について論じた浅野（2011）は、「個人の力によっても親しい他者との協力によっても解決の難しい問題に向けて、必ずしも親しくない他者たちとの間に協力関係を組織していくこと」を社会参加と定義し、「親しい関係を超えて、その問題の解決に利害や関心を持つという以外の共通点が必ずしもない人々の間の協力関係を組織していくようなつきあい方の作法を公共性と呼んだ上で、この作法が「趣味を仲人にした人間関係の中で培われる可能性について」検討している（浅野 2011: 10-11）。ただその一方で、

*1　KDDI 総合研究所
*2　北陸先端科学技術大学院大学 (JAIST)

現在見られる趣味によるつながりは、政治性を帯びたものから離れたところで、「趣味やつきあいそれ自体の『楽しみ』にのみ準拠している」としている（浅野 2011: 80）。また、趣味によってつながるコミュニティは、普段から親しい人ではない人々との関係性を結ばなければならないために、コミュニティを通してつながりの作法を身につけているのではないかとも論じている。このつながりの作法こそ、本稿で明らかにしようと試みるものである。

趣味縁は現実空間（対面状況）のみによって結ばれるわけではない。現在では情報通信技術の進展によって、仮想空間上でも成員が共通の関心などを持って集うオンライン・コミュニティが形成され、それによって結びつくことが多い。遠藤（2008）は、関心を共有する小集団をコミュニティ・オブ・インタレストと呼んでいるが、オンライン上で形成されるコミュニティ・オブ・インタレストの中には、趣味縁によってつながっている人々も含まれていると考えられる。

本稿では、二次創作を行う腐女子の同人作家コミュニティに見られるつながりの作法の観察を通して、成員間の異なる属性や非対称性がどのように内部で処理され、趣味の活動の場が形成・維持されているのかについて検討したい。なお、二次創作を行う腐女子の同人作家は、オタクグループの中の、腐女子という集団の一部であり（大戸・伊藤 2010）、オタクの人々は一般社会を生きる“一般人”でもある。そのため、二次創作を行う腐女子の同人作家を対象とした以降の分析では、二次創作を行う腐女子の同人作家だけではなく、腐女子全体やオタク、一般人に紐付けられる特徴にも言及する。

Ⅱ 調査対象およびフィールドワークの概要

1. 腐女子について

腐女子とは、「（少年も含む）男性同士による恋愛を主題とするフィクションや想像などを嗜好する女性」（大戸・伊藤 2010: 69）のことを指す。彼女たちは、一般市場などで流通している男性同性愛フィクションを消費するだけではなく、彼女たち自身も男性同性愛フィクションを生み出している。彼女たちは一般市場で流通しているコンテンツ作品（漫画、アニメ、ゲームなど）に登場している男性キャラクタや、実在する（した）人物のほか、無機物、自然現象、概念など、様々なものの関係性を男性同性愛的関係に再構築する。そして男性２名（もしくは複数名）によって織りなされる恋愛関係を想像／創造し、それぞれのキャラクタに、「攻め」「受け」という役割をそれぞれ与え、「カップリング」と呼ばれる組み合わせを行う[1]。彼女たちによって再構築され生み出された関係性は、彼女たち自身の手によって二次創作と呼ばれる作品上に表現され、同人作家の手によって同人誌として発行されることもある。二次創作とは「原点となる創作物から登場人物（キャラクタ）や世界観などを借りて創作した創作物」のことを指す（小山 2013: 189）。彼女たちは作品発表の場として、自身の Web サイトやブログを立ち上げたり、Twitter や pixiv といった SNS を利用したり、同人誌即売会に参加することで、自身の二次創作作品を発表し、アピールしていく[2]。

ただ、このような彼女たちに向けられる一般人[3]からの視線は決して温かいものではない。今日まで、彼女たちを取りあげたテレビ番組や雑誌記事の多くは、腐女子という存在を一般社会の基準や規範から逸脱した異端なものとして表象してきた[4]。このような状況を受け、彼女たちは「腐女子隠し」（大戸・伊藤 2010）とも言える実践を行い、自身が腐女子であることを周囲の人間に気づかれないようにしている。彼女たちは、実名と腐女子という属性が結びつくことをリスクと考えているため、Twitter や pixiv といった SNS 上で、匿名を用いて自身と同じカップリングを好む他者と密やかにつながり、コミュニティを形成する。

2. 腐女子に関する先行研究

1　相田によれば、「攻め」とは性交時に挿入する側を、「受け」とは挿入される側のことを指し、作品中に性交の描写が直接的に描かれているか否かにかかわらず、カップリングされたキャラクタらにはこれらの役割が必ず付与されるか、読み込まれているとされている（相田 2013: 213-214）。

2　二次創作の種類としては主にイラストやマンガ、小説などがある。『コミックマーケット 35 周年調査』におけるアンケート結果（21,394 名）からは、女性サークルの発表形式としては、マンガ（70.4%）が大多数であることが明らかになっている（コミックマーケット準備会・コンテンツ研究チーム 2011: 2）。そのため、本稿においては、サークル参加者の属性として最も多い二次創作のマンガを発表する腐女子の同人作家を対象としている。

3　彼女たちは、腐女子でもオタクでもない人々を一般人と他称する。

4　マスメディアの多くが「現実の恋愛が出来ない、モテない、など性的欠陥と彼女たちのファン行為を結びつけて論じる傾向」にある（名藤 2007: 71）。このようなマスメディアなどによる表象をオタクや腐女子は内在化させており、彼女たちは、意識的に自身らを一般人の下位に位置付けようとする。

男性同性愛フィクションを嗜好する女性に対する分析は、1990 年代ごろより本格化し、主にジェンダー論の土壌で育まれてきた[5]。これは、この領域を担ってきたのが主として少女・女性であったことから、分析に「男女の非対称性を主題とするジェンダー論が方法論に採用され」てきたためである（金田 2007b: 53）。特に初期の分析においては、男性中心主義や家父長制、異性愛中心主義といった現行の社会制度や社会規範との軋轢によって生み出された存在として、また、そのような社会に対する抗いの萌芽として描き出される傾向にあった（中島 1995, 2005; 上野 1998; 溝口 2000）。例えば、中島は、男性同性愛フィクションが、社会の中で苦境におかれ傷つけられてきた少女らにとってのシェルターとして機能していることを明らかにしている（中島 2005）。また、中島はアニメパロディ同人誌の世界を取り上げ、アニメパロディ同人誌の世界の人々が優しい理由として、強烈なコミュニケーションの世界、技術レベルの高低や、売れる／売れないといった評価で判断される世界、つまり淘汰の世界に参加したくないからだと指摘している（中島 1995）。しかしながら、二次創作を行う腐女子の同人作家コミュニティを内部から捉えれば、彼女たちのコミュニティは、必ずしも強烈なコミュニケーションの世界から逃げ込んできた少女たちの避難場所やユートピアではないと言える。村瀬は、（腐女子も含む）オタクが、「個人が知識や『所有物』によって階層化される仕組みを内包して」おり、「『オタク』同士の厳しいヒエラルキーによって疲弊し」ていると論じている（村瀬 2003: 148-149）。また金田は、彼女たちのコミュニティを解釈共同体として読み解いた上で、彼女たちのマンガ同人誌の市場は「（作品への）愛（attachment）」「人気（popularity）」「技術（skill）」といった複数の文化資本によって序列付けられているとし、同人作家達は同人活動を通してなんらかの報酬を得ていると指摘している（金田 2007a）。つまり、ユートピア的に捉えられてきた彼女たちのコミュニティ内では、（ある種中島の指摘する、強烈なコミュニケーションの世界が再現された）序列をめぐる闘争が行われているのだと言える。序列をめぐる闘争に関しては、彼女たちが原作に対する「愛」という共通の感情によって参集していること、その「愛」を賭け金とした、コミュニティ内での認知という報酬を巡った闘争が行われていることが明らかになっている（大戸・伊藤 2019）。

上記のように、男性同性愛フィクションを嗜好する女性に関しては、彼女たちの実践や心性の特徴や社会制度や社会規範との関係について詳細に分析されてきた一方で、一枚岩として描ききれない当該コミュニティ内での個人対個人の対立については深く分析されてきたとは言えず、コミュニティ成員間の様々な差異によって生まれる内部の非対称性に関しても、学問の土壌で語られることも少ない。また、コミュニティ成員間の闘争と調停について論じた大戸・伊藤（2019）においても、彼女たちが「愛」を競い合っていることを示したが、金銭的格差や属性の多様性などには触れなかった。そのため、コミュニティ内の多様性や対立、調停方法について詳細な検討を行う必要があるだろう。

3. フィールドワークの概要

本研究における調査は、主に東京ビッグサイト（東京国際展示場）にて年に 2 回開催されているコミックマーケットのほか、国内の大小様々な同人即売会で実施した。第 1 筆者（大戸）は、自身が腐女子の二次創作者であることから[6]、“腐女子ネイティヴ”の立場で 2008 年から現在まで継続して参与観察を行っている。なお、第 2 筆者（伊藤）も、コミックマーケットには 2 度訪れるなど、限定的ではあるが現地調査を協働して実施している。

参与観察およびインタビューは、2008 年～ 2019 年の期間、大戸が所属している（していた）4 つのグループを対象に実施した。ただし、腐女子同士のコミュニケーションについては、日常的に Web 上でも行われているため、同人誌即売会のみの観察では不十分である。そのため本稿では、同人誌即売会やオフ会などでの雑談で得られた情報や調査中のメモ書きなども用いて一部構成している[7]。また、観察によって得られたデー

5　男性同性愛フィクションを嗜好する少女や女性の実践に関する議論は、日本国内だけではなく、国外においても散見される（ペンリー 1998(1997)、サーモン・サイモンズ 2004(2001)）。国内外の腐女子をめぐる議論はいくつかの差異を示しながらも、日本の二次創作と欧米の二次創作が同時代的に発展しているとの指摘もある（Kinsella 2000）。また、彼女たちに対する分析の多くは、主にインタビューなどを軸にした定性的な調査・分析であるが、近年では、定量的に彼女たちの実態を把握しようとする研究もなされている（山岡 2016）。

6　大戸は、腐女子の二次創作者（同人作家）としての Twitter 上のアカウントを持ち、毎日他の腐女子の二次創作者（同人作家）とコミュニケーションをとりつつ、二次創作作品を Web 上に公開したり、同人誌を作成して同人誌即売会に参加したりしている。

タ以外の発言データ、特に大戸とのやり取りの中での発言などに関しては、所属と調査内容を明かした上で許可を取り掲載している。

本稿は、自身も二次創作者である腐女子ネイティヴと、非ネイティヴの人類学徒との協働によって書かれている。ネイティヴによる研究には、その分析の客観性において疑念が生じることも多い。そのため本稿では、ネイティヴと非ネイティヴ両者の対話と協働により、内部の実践や暗黙知を外向きに言語化し距離化させ、客観性の担保を試みている。ただ、本稿では協働のエスノグラフィに関する検討を議論の中心においてはいないため、協働に関しては別稿に譲ることとし、以下、具体的な事例に入っていきたい。

Ⅲ 二次創作を行う腐女子の同人作家コミュニティの実践

1. コミュニティにおけるつながりの特徴

まず、二次創作を行う腐女子の同人作家の個人属性の多様性について確認したい。彼女たちは決して一枚岩な存在ではない。大戸の行なった調査では、二次創作を行なっている腐女子の同人作家の年齢は10代から40代、職業も学生、会社員、大学教員、フリーター、専業主婦、漫画家、塾講師、声優など幅広く、結婚している者もいれば未婚の者も、子供がいる者もいる。各人の居住地も全国に散らばっており、活動歴についても、最近同人活動を始めた者から同人活動を数十年行なっている者もいる。このように、二次創作を行う腐女子の同人作家と一言で言っても多種多様な人々が混在していることがわかる。このようなコミュニティの特徴は、まさに浅野や加藤が示す趣味縁の特徴とも一致していると言えよう。彼女たちは趣味という共通項によって参集しているため、年齢や学歴、職業などにとらわれないコミュニティを形成する。また、居住地に制約されない彼女たちの参集は、コミュニティ・オブ・インタレストに見られる特徴でもある。実際に、様々に異なった属性を持つ二次創作を行う腐女子同士（もしくは二次創作のオーディエンス）の出会いのプラットフォームとなっているのは、現在ではTwitterやpixivなど、仮想空間上で利用されているSNSである。彼女たちはそこに自身の二次創作作品を発表し、その作品を通して他の二次創作者や同人作家、オーディエンスとつながっていくのである。

彼女たちの関係形成において特徴的なのは、自身と同じカップリングを好む相手とのみ関係をつなげていくことである。彼女たちは「腐女子であること」「同じ原作のファンであること」「同じカップリングが好きであること」などの幾重ものフィルターを通過した、自身と限りなく嗜好が類似した相手とのみつながり、極細分化されたコミュニティを形成する[8]。その際、彼女たちは互いをペンネームやハンドルネームで呼び合い、年齢や職業、居住地といった情報については一切必要としない。

例を挙げたい。以下の記述は、2010年に開催されたコミックマーケット79において、大戸と同人作家であるSさんとGさんとのやりとりである。コミックマーケット79に大戸は同人作家として参加しており、実際に同人誌売買のスペースにて活動を行っていた。

【事例Ⅲ-1】共通の興味関心のみによるコミュニケーション

大戸が同人誌を頒布していると、SさんとGさんが差し入れを手に大戸のスペースに駆け寄ってきた。SさんもGさんも大戸の知っている〔Web〕サイトの管理人だったので、お互い「○○（サイト名）の××（名前）です」とペンネームで紹介をする。挨拶後は、「△△（キャラクター名）受け、少ないですよね・・・」、「私の描いている設定ってマイナで・・・」「新作の発売日が・・・」など、自身の属しているジャンルの話にのみ終

7　本稿においては、調査対象者 の属性（年齢・職業や居住地、どのジャンルのコミュニティに所属しているのかなどの詳細な情報）や、彼女たちが作成した同人誌やTwitterなどの実際の画像などは意図的に記載していない。これは、コミュニティ自体がごく少数の成員によって形成されており、具体的な記述を行うと、検索などによって個人が特定される危険性があるためである。また、本稿では彼女たちの語りを可能な限りそのまま残すよう努めたが、上記の理由により、発言内容に関して一部加工などを施している。なお、〔 〕内の言葉は筆者らによる補足である。

8　二次創作や同人誌作成などを行う腐女子のコミュニティに関しては、作品の解釈を共有する解釈共同体として当該コミュニティを捉えるという視点が金田（2007a）によって提示されている。そもそもパロディという解釈の成立には「解釈コードを共有する集団の存在が不可欠」であり、彼女たちはマンガ同人誌を作ることによる会話実践によって、「解釈共同体」を生み出している。また、各解釈コードによって共同体は細分化されているという（金田 2007a: 170）。

始し、個人の属性にかかわることについては触れることはなかった。

（2010 年 12 月 29 日）

この事例は、趣味縁でつながり合う人々の特徴を表していると言える。彼女たちの興味は趣味の内容そのものにある。どこの誰かということよりも嗜好の類似性を重要視するという彼女たちの関係の特徴は、彼女たちが行う上記のようなコミュニケーションにも表れている。そもそも彼女たちのコミュニティでは、個人の属性を問うこと自体が暗黙のうちにタブー視されている。それは、彼女たちが自身のことによってではなく、あくまで共通の興味関心によって他者とつながりたいと望んでいることの証左となろう。

上記のような実名ではなく匿名で、自身のことではなく共通の趣味嗜好の話題によってつながり合おうとする関係は、コミュニティに参与し続ける限りにおいて濃密に維持されるが、成員の興味関心が他の作品（ジャンル）やカップリングに移行した場合、当該コミュニティで築かれた関係は消滅する傾向にある。例えば以下の記述は、コミックマーケットにサークルでの参加を予定していた同人作家の A さんに、Web 上で知り合った他の同人作家に当日挨拶に行くのかと尋ねた時のものである。

【事例Ⅲ -2】期間限定的な関係への志向性

A　「挨拶回りは行かない…」

大戸　「何で? 友達のところは? サイトとかによく来てくれる別のサークルの人は?」

A　「みんな大概やめていって…」

大戸　「やめていって…て?」

A　「ジャンルをやめていったり、連絡〔を〕取らなくなったり…」

大戸　「メールは出さないの? 相手が次のジャンルに移っても…」

A　「私は基本的に淡白だから…。メールするときも、やめてもすぐに〔関係を〕切れるように、相手とのちょうどいい距離を初めから探しているんだ…」

（2008 年 8 月 13 日）

A さんの発言からは、コミュニティ内での人間関係に関しては、初めから長期的な関係を期待しておらず、「ジャンルをやめていったり、連絡〔を〕取らなくなったり」した時点で、相手を深く追うことはなく、コミュニケーション自体も断絶するような、期間限定的な関係への志向性が読み取れる。そのため、自身が属していたコミュニティを離れ、再び新しいコミュニティに所属する場合、以前の仲間とは関係が切れてしまっていることが多く、仲間探しを一からはじめなければならないのである。例えば大阪在住の既婚女性で、声優の仕事をしながら二次創作活動を行なっている W さんは、2012 年当時、同人活動に復帰したばかりであった。そんなとき大戸と知り合い、同人作家のネットワークができたことで、「1 人寂しくしていたところ、仲良くしていただけて心が休まりました」と大戸にメールを送っている（2012 年 10 月 9 日）。W さんは続けて、1 度コミュニティを離れてしまうと戻るきっかけがなかなか掴めないこと、さらにまた 1 から関係を作らなければならないという煩わしさから、一時期同人誌の作り手から、同人誌などは作らず読むことだけに専念する「読み専」になってしまったと語っている[9]。

以上見てきたように、彼女たちは、各人の趣味嗜好によって極細分化されたコミュニティを形成し、自身と極めて嗜好が近しい人とのみつながり合うことを求めている。また、そのつながりでは実名性は求められておらず、匿名的なコミュニケーションが求められている。しかし、このようなコミュニティは、成員のその時々の嗜好によってつながり合う不安定で流動的なものであり、1 度コミュニティから離れてしまった場合、そのコミュニティ内で築かれた人間関係は次のコミュニティには引き継がれにくく、新しいコミュニティでは人間関係をまた 1 から構築しなければならない。つまり、二次創作を行う腐女子のコミュニティは、類似性によって参集する匿名の成員によって流動的に形成される、関係の永続が困難なコミュニティであるといえよう。もちろん、このような期間限定的な関係性への希求は、強固な関係性を基盤にしていない他の趣味のコミュニティにも見られるだろう。加藤（2017）が示しているように、趣味縁は、加入脱退が個人の自由意志によって選択できるため、結果として参入障壁や撤退（退出）障壁が低くなり、関係自体の流動性が高くなる。そのことが、彼女たちの期間限定的な関係への志向性に現れているものと考えられる。

9　彼女たちの手によって生み出される同人誌は、作られたという事実だけでは読まれることは難しい。なぜなら、彼女たちの同人誌は原作（一次創作）の文脈を踏まえて作られる二次創作だからである。原作を読んだ、もしくは視聴した経験がない人々に二次創作の内容を理解してもらうことは難しい。そのため、自身の同人誌を読んで欲しい場合、原作を読んだ、もしくは視聴したことがあり、二次創作に理解のある、自身と同じカップリングを好む人々を探し出し、何らかの方法でつながった上で、自分の作品をアピールしなければならない。W さんの言う「1 から関係を作らなければならないという煩わしさ」は、この点にあると言える。

2. 成果の産出と評価

II で示したように、彼女たちは原作に対して解釈を行い、その“成果”を二次創作作品としてコミュニティ内に発表する。そして成員はその解釈や表現に関して評価を行う。コミュニティ内に発表される作品は多種多様である。作風がギャグ調のものやシリアスなもの、原作の設定に忠実なものから遠くかけ離れたもの、わずか数ページの作品から数百ページにも及ぶ作品、性描写があるもの・ないものなど、バラエティに富んでいる。また、彼女たち自身の描画技術も拙いものからプロ並みのものまで幅広い。興味深いのは、調査では、過度な性描写や暴力表現が盛り込まれている作品もあることが確認されているが、それらの作品を公開した行為について二次創作者が非難されることは極めて少ないということである。反対に、（腐女子の二次創作者も含む）二次創作コミュニティ全体においては、話や絵柄にオリジナリティが認められないものに関しては、強い忌避感や反発が持たれている。例えば大戸・伊藤は、二次創作者らが既存の二次創作作品と自身のネタが被ってしまうことに対して極めて過敏であることや、他者の絵を敷き写ししているにもかかわらず、あたかも自身が 1 から描いた絵であるように主張した場合、その二次創作者は、コミュニティ内で徹底して非難されると報告している（大戸・伊藤 2019: 223-224）。つまり二次創作者コミュニティでは、作品の精度やどのような表現を行なっているかといったことよりも、作品のオリジナリティが確保されているか否かが重要視されているのである。

次に、作品に対する評価について触れたい。上述したように、彼女たちのコミュニティ内には原作に対する多種多様な解釈と表現が投げ込まれる。彼女たちは、その作品が気に入れば（Twitter や pixiv であれば）お気に入りボタンを押したり、肯定的なコメントを送ったり、投稿作品を引用して派生作品（n 次作品）を作るなどのポジティヴな反応を示し、気に入らなければ非難や否定的なコメントをせずに、無視をするという反応を示す。例えば文学界などに見られるような、作品の質を高めるための批評や講評といった実践も見られない。つまり、どのような内容（表現）や技術レベルの作品であっても、原作に対して二次創作者が行なった解釈に対しては基本的にそれを否定しないという、解釈への相対主義的関与とでも言える態度が、コミュニティ成員間で徹底されているのである。このような評価実践を徹底することによって、腐女子の二次創作者らは、一般社会における社会規範や性規範などに束縛されない、自分の嗜好を盛り込んだ表現を、否定されるリスクなしに発表できる空間を確保しているのだと言える（大戸・伊藤 2019: 221）。

このように見ると、彼女たちのコミュニティは自由で優しい空間であるように思える。しかしながら、内部の視点から見ると、彼女たちのコミュニティは認知をめぐって競い合う闘争の場として捉えることができる。大戸・伊藤（2019）が示したように、二次創作を行う腐女子の同人作家コミュニティでは、同人誌の売り上げが多く、コミュニティの中での影響力をもつ「大手」を頂点としたヒエラルキーが形成されている[10]。大手のようにコミュニティ内で広く認知され、評価が高まると、「他の作家から『ゲスト原稿』依頼を持ちかけられたり、『アンソロジー参加』といった自身の解釈発表の場が開かれ、注目を浴びる機会が拡大する」。「そこでまた新しい成員に肯定的に評価されれば、さらに認知度を上げることができる。認知度が上がれば、コミュニティ内部だけではなく、別のコミュニティや一般商業誌の関係者の目にもとまる可能性がでてくる。つまり、コミュニティ内における認知度の高まりは、作品が評価される場（人的ネットワーク）を広げ、『地位』や『名誉』を得る機会を増大させることを意味している」のである（大戸・伊藤 2019: 225）。このことは、二次創作コミュニティに広く見られるものである。

ただ、上記のような認知度の高低や評価について、彼女たちの口から表立って語られることはない。むしろ、より高い認知や評価を求めていることを語ることは、タブー視される傾向にある。これは二次創作を行う腐女子の同人作家に特に見られる行動である。しかしながら、彼女たちが認知や評価を求めていない訳ではない。実際には彼女たちは認知度を高める（ひいては評価される）ための様々な実践を密やかに行っている。例えばそれは、作品をコミュニティに投入する時間の選択に現れている。

10　ただ、注意しなければならないのは、このヒエラルキーは決して固定的なものではないという点である。例えば複数のジャンルを掛け持ちしている同人作家の場合、あるジャンルのコミュニティでは作品が高く評価され、大手として認知されていたとしても、別のジャンルのコミュニティではあまり評価されず、大手よりも下の「中堅」や「弱小」に位置付けられるという状況もしばしば見受けられる。つまり、特定のコミュニティ内で得られた地位や名誉は別のコミュニティにそのまま引き継ぐことは出来ないのである。

【事例Ⅲ -3】作品を投稿する時間への言及

同人作家であるKさんに、一ヶ月後のコミックマーケットにて発行予定の大戸の新刊のサンプル画像をTwitterにアップロードしたことを伝えると、Kさんは「そんなサンプル〔Twitterで〕見ていないよ」という。私が「いや、アップ〔ロード〕したよ、昼の3時に」と告げると、Kさんは「なんでそんな時間にアップ〔ロード〕するの！新刊のサンプルなんでしょ！夕方か19時以降にアップ〔ロード〕しなよ。みんなその時間に一番〔Twitterを〕見てるんだから」と強い口調で大戸を怒る。

（2019年7月9日）

多くの同人作家は、自身の（発行予定の）作品の途中経過について画像付きでTwitter上に公開しており、現在自分がどのような作品を作っているのかを成員に周知しつつ、作品の宣伝活動を行なっている。また、それらの情報に関しては、多くの成員がTwitterを見ているであろう時間に投稿し、少しでも多くの成員の目に触れるような工夫を行っている。例えばKさんは投稿時間に関して「夕方か19時以降」と述べているが、その理由としては、二次創作を行なっている腐女子の同人作家の多くが学生や社会人であるためである[11]。学生や社会人である彼女たちは、就学・就業中の時間は頻繁にTwitterを確認することは難しい。そのため、彼女たちは夕方以降にTwitterに書き込みを行なったり、成員の呟きを確認したりしている。つまり上記の例は、成員の多くが見ていないだろう時間に作品のアピールを行ったとしても、何の効果もないこと、アピールするのであれば、成員の多くが見ているだろう夕方以降の時間に投稿しなければ意味がないという、Kさんから大戸への忠告なのである。

コミュニティ内での認知や評価を望むのであれば、何度も同じ作品を繰り返し発表したり、様々な場所で宣伝したりすればいい。しかしながら、多くの場合彼女たちは自身の作品を1度だけ、成員が一番多くTwitterを見ている時間を見計らって密やかに発表し、認知と評価を求める。つまり、認知と評価に対する欲求自体は認められている一方で、それを表立って成員に伝える行為は、コミュニティの中でタブー視されているのである。

3. 二次創作・同人活動と金銭に対する意識

個人の属性を問うこと、認知や評価を求めていることを成員に伝えることのほかにタブー視されているものとして、金銭に関する話題があげられる。このことも、二次創作を行う腐女子の同人作家に特に見られる行動である。彼女たちは自身の作品をWeb上で公開するほか、自費出版という形で同人誌を作成し、売買（頒布）している。この時、問題になるのは、出版や売買に関わるコストについてである。同人誌を発行する際、原稿作成、編集、印刷所への発注・入稿（もしくは印刷と製本）、イベント参加申込、告知、実際の販売（頒布）といった作業は全て同人作家1人で行うことが一般的である。さらに、制作に関わる道具類の費用、即売会の参加費、印刷費、即売会会場への交通費、宿泊費など様々な経費が必要となる[12]。そのため、同人誌の売り上げだけでかかった費用を回収することは難しい。例えば『コミックマーケット35周年調査』におけるアンケート調査の集計結果では、（二次創作サークルも含めた）サークルの年間収支に関して、「大半サークルが赤字覚悟で参加していることが、男女とも60%を越えるサークルが赤字であることからも見て取れる」との指摘がなされている（コミックマーケット準備会・コンテンツ研究チーム2011: 3）。ここからは、彼女たちの多くは必ずしも利益追及のために二次創作活動を行っているわけではないということがわかる。

さらに、彼女たちの金銭に対する態度が現れている例をあげよう。それは、同人誌の価格設定である。同人誌の価格は、同人作家の各人の判断で自由に設定できるが、同人作家達は、まるで見えない暗黙のルールに従うかのように価格を決定している。彼女たちの中には、他の同人作家が設定した価格とずれた価格をつけない、原価を無視したような高い価格をつけないという暗黙のルールがある。そしてこの価格の決定は、コミュニティの他の成員に倣った形で決定される。一般市場から見れば奇妙に見えるかもしれないが、同人市

11　コミックマーケット準備会・コンテンツ研究チームの調査によれば、コミックマーケットに参加している女性サークル参加者は20代（39.7%）30代（45.3%）であり、参加者の年齢層は広いが、ボリュームゾーンは20代から30代にあると言える（コミックマーケット準備会・コンテンツ研究チーム2011: 4）。そのため、二次創作を行う腐女子の同人作家のアピールの方法も、20代から30代の読者を想定したものとなっている。

12　同人作家の多くは、学生や社会人といった、専業作家ではないアマチュアの作家がほとんどである。そのため、各人の状況によって作品制作や同人誌即売会への参加にかけられるコストは全く異なっている。特に地方在住の学生にとって、同人誌作成やコミックマーケットへの参加は、金銭コストが何よりのネックとなっている。そのため、中学生や高校生などの学生同人作家は、家のプリンターや学校のコピー機を使用して“秘密裏に”同人誌を作成したり、複数人で1つのサークルを結成して参加費を折半することで、金銭的コストを低く抑えるための工夫をしたりしていることが調査ではわかっている。

場はコミュニティ内部において価格競争というものを行わない。同人誌の多くはB5サイズかA5サイズの冊子であり、表紙がフルカラーで40ページ前後のものは500円程度、100ページ前後のものは1000円程度で売買され、どの販売スペースにおいても価格は安定している。在庫についても、古いものは値下げなどされることなく古紙回収などで処分されることが多い。同人誌即売会での参与観察においても、「値下げしました」や「○○冊買うと○○％オフ（○○円引き）」といったような、購買心理を刺激するような文言や発言は一切見られなかった。さらに、同人作家たちは購入希望者が頒布スペースに来るまで、友人たちと会話をするか、1人で静かに絵を描いたり、会場で購入した同人誌を読んでいたり、携帯電話でゲームをしたりしており、頒布スペースの前を通りかかる人たちに向けて積極的に作品をアピールしたり、購入を促したりするような行為は見られなかった。また、購入希望者が頒布スペースに来た際にも同様であった。同人誌の購入に関しては完全に購入希望者側に委ねており、購入希望者の意思決定に同人作家が積極的に関与することもなかった。

ここで疑問となるのは、何故彼女たちは金銭的利益を積極的に求めないのかということである。同人誌の売り上げが高ければ高いほど（頒布数が多ければ多いほど）、必然的に大手となるルートに乗ることができる。しかし、上記のように、彼女たちのコミュニティでは金銭的な話題は隠される傾向にある。むしろ、金銭的話題自体がコミュニティの中でタブー視されている。また、彼女たちは直接的な金銭の話題だけではなく、金銭的利益が想起されるような事項にも敏感である。彼女たちのコミュニティ内では、同人誌を何部印刷したのか、何部売れたのかなどについては、親しい間柄であっても一切語られない。実際に大戸も（あえて）何度かコミュニティ内で売り上げや発行部数について話題をふったところ、先ほどまで活発に会話をしていた成員が一様に口をつぐむという状況に幾度も遭遇した。

彼女たちが金銭的な事柄の話題を避けようとする理由の1つとしては、そもそも彼女たちのコミュニティ自体が非商業主義を建前として発展してきたからだと考えられる。例えば彼女たちは同人誌の売買においても、販売や売買という言葉を選択せず、慣習から頒布という単語を好んで使用しているが、この頒布の使用は、もともと同人誌が同人作家間において無償で交換されていたものであり、同人誌を交換するといったファン同士の交流が営利として捉えられていなかったことに由来している。しかしながら、この金銭に関する話題がタブー視されている最も強い理由としては、金銭的な話題が、コミュニティ内における自身の序列の暴露につながっているからであると考えられる。二次創作を行う腐女子の同人作家コミュニティにおいては、認知度が高い同人作家は売り上げ（頒布数）も多く、相対的に大手となりやすい。一方、認知度が低く売り上げ（頒布数）の少ない作家は下位の序列となりやすい。つまり、金銭に関する話題は、コミュニティ内における自身の地位の可視化に繋がるため、タブー視されているのである。

Ⅳ おわりに

本稿では、同一の趣味によってつながり合うコミュニティ内において、成員間の異なる属性や非対称性がどのように内部で処理され、お互いを肯定し合いながらつながり合っているのかについて、二次創作を行う腐女子の同人作家コミュニティに焦点を当て、趣味縁をキーにして分析を行った。趣味縁によって形成されるコミュニティには、多種多様な属性や価値観（解釈）を持った人々が集うため、コミュニティ内部においては様々な対立が発生する。二次創作を行う腐女子の同人作家コミュニティにおいては、(1)匿名性の徹底、(2)解釈への相対主義的関与とオリジナリティの要求、(3) 金銭的話題の忌避という3つの規範意識をコミュニティ内で徹底させることで、属性の非対称性によって引き起こされる対立を未然に回避し、否定のない、自由な表現空間を形成・維持していることが明らかとなった。

しかしながら、なぜ彼女たちはこのような匿名的で差異が隠されたコミュニティを形成しようとするのか。その理由の1つとしては、おそらく個人の属性には常に一般社会からのレッテル付け、価値付けがなされていることが挙げられるだろう。一般社会の様々な価値付けによって彼女たちはこれまでネガティヴに評価されてきた。例えば、腐女子の男性同性愛フィクション嗜好は異性愛至上主義によって、二次創作を行う腐女子による主体的な性的表現は女性のジェンダー規範によって、同人作家の非営利主義は市場の営利主義によって、これら一般社会の規範から逸脱するものとして否定的に評価されてきた。また、彼女たちを取り巻く一般社会においては、市場では通用しない（と評価される）技術レベルの者、多くの読者を集められるような作品を作らない／作れない者などは、営利を中心とする社会システムから排除され、価値付けられてはこなかった。また、年齢、既婚者か否か（この点に関しては、女性の方が未だ強く影響を受けている）、正社員

か否か、年収の高低、居住地が都市／地方といった属性上での一般社会における評価によって勝ち組／負け組といったレッテルが貼られてきた。つまり二次創作を行う腐女子の同人作家たちは、中島（1995）が論じる、誰かが選ばれることによって誰かが排除されるシステムにおいて絶えず評価され、時に傷つけられ、疲弊してきた。この点は、二次創作を行う腐女子の同人作家だけではなく、一般社会を生きる多くの人々に当てはまる点でもある。このような常に評価され、時に傷つけられる社会に対して、二次創作を行う腐女子の同人作家は、誰かが選ばれることによって誰かが排除されることのない、誰かが傷つけられるということのないコミュニティを形成しようと試みているのだと考えられる。それが、彼女たちのどのような解釈や表現でも受け入れ、無視はしても否定はしないという行動に現れているのである。

興味深いのは、彼女たちが排除しようと苦心している、ある種の競争性を持ったシステムが彼女たちのコミュニティの中で再現されてしまっている点である。匿名性が担保され極めて高い類似性によって結びつくことで安定しているコミュニティ内において、個人間の差異や格差が可視化されることは、コミュニティの瓦解を招きかねない。そのため、彼女たちは上記３つの規範意識を成員間で徹底して共有させ、外部の評価軸があたかも存在していないかのように振る舞うことで、コミュニティ全体の内的調和を保とうとしているのである。このことは、どのような解釈（たとえ一般社会では異質なものと捉えられ、下位なものとして評価される表現）であっても、自身と類似した嗜好を持った他者と安心してつながり合え、自身の嗜好を肯定的に捉え得ることのできる可能性を持った場を、二次創作を行う腐女子の同人作家コミュニティが提供しているということを意味していると言えよう。また、本稿で明らかとなったこれらのつながりの作法は、二次創作を行う腐女子の同人作家のコミュニティだけではなく、オタクのコミュニティ、ひいては趣味のコミュニティへと、さらに広く適応できる可能性を持っていると考えられるだろう。

最後に今後の課題について述べておきたい。第１に、彼女たちのコミュニティが単なるファンダムではなく、創作者コミュニティであることに鑑みると、生み出される二次創作作品には原作から引き継がれる要素と、同人作家が独自に変更を加えるオリジナルな要素が入っているはずである。しかしながら、そのバランスは難しい。例えば原作の設定から大きく逸脱してしまった場合や、「原作へのリスペクトが存在していない場合、評価者から『愛がない』と否定的な評価をされてしま」い、コミュニティ成員から強い非難を受ける可能性がある（大戸・伊藤 2019: 219）。そのため、二次創作を行う腐女子の同人作家らは、原作とオリジナリティのバランスポイントを調整することになるが、その方法について詳らかにできなかった。また、彼女たちの作品にもオリジナリティが求められており、オリジナリティがない作品は忌避される傾向にあることを述べたが、どのようにして彼女たちが自身のオリジナリティを担保し、他の成員はそれを判断しているのかについても、今後明らかにしていきたい。

第２に、彼女たちのコミュニティ実践である、自身の知識や経験の総体としての成果をコミュニティに投入し、評価され報酬を得るという一連のプロセスや、他の成果との差分が強く求められているという部分、彼女たちがコミュニティ内での認知を求めているといったことについては、おそらく何らかの成果物が生み出されるその他のコミュニティでも確認できるだろう。例えば、先行成果との差異を持った成果の産出、コミュニティへの成果投入、引用、評価、それによるコミュニティの境界の生成、報酬として認知を求める点などは、（特に自然科学系の）科学者コミュニティのジャーナルシステムと重なる部分が多分にある[13]。また、虚構を虚構と認識しながら対象に熱狂するという思考に関しては、アイドルや俳優などのファンダムとの間にも類似点が見られるだろうし、その他の趣味のコミュニティと異同についても議論する必要があるだろう。しかしながら、本稿では紙幅の関係から、他のコミュニティとの比較を行うことはできなかった。この点についても今後の課題としたい。

13　本稿のアイデアの一部は科学社会学的な議論に触発されている。伊藤（2009）は、「科学者は論文という形式で知識を公表（公表はマートンによればノルムとされる）した時点で、その知識に対する私的な所有権は失われると言えるが、それと引き換えに、その知識の創造者・作り手であるという名誉や知名度を得、所属する組織における地位や身分の上昇、それに伴う研究条件・経済的条件の向上といったさまざまな褒賞を獲得する」と指摘しており、論文という成果物を通して、科学者個人には名誉や知名度がもたらされ、所属組織内における上位の序列に移行できる可能性（報酬）の存在を示している（伊藤 2009: 29）。

参照文献

（日本語文献）

相田　美穂

2013　「期待される腐女子像からのエクソダス――「可能性」の読み込み／誤読に関する一考察」『広島修大論集』54(1): 207-220。

浅野　智彦

2011　『趣味縁からはじまる社会参加』岩波書店。

伊藤　泰信

2009　「学という市場、市場のなかの学――人類学とその外部環境をめぐって」『シリーズ来るべき人類学――経済からの脱出』織田竜也・深田淳太郎（編）、pp. 25-55、春風社。

上野　千鶴子

1998　「ジェンダーレス・ワールドの〈愛〉の実験――少年愛マンガをめぐって」『発情装置――エロスのシナリオ』pp. 125-154、筑摩書房。

遠藤　薫

2008　「否定の＜コミュニティ＞――＜オタク＞の発生とインターネット」『ネットメディアと＜コミュニティ＞形成』遠藤薫（編）、pp. 79-96、東京電機大学出版局。

大戸　朋子・伊藤　泰信

2010　「同一嗜好の女子たちをめぐるメディア・表象・実践」『九州人類学会報』37: 69-87。

2019　「二次創作コミュニティにおける『愛』をめぐる闘争と調停」『コンタクト・ゾーン』11: 207-232。

加藤　康子

2017　「趣味縁研究の系譜と現代社会におけるその現れの一例――群馬県前橋市『前橋○○部』の事例から」『文化経済学』14(2): 46-54。

金田　淳子

2007a　「第７章　マンガ同人誌――解釈共同体のポリティクス」『文化の社会学』佐藤健二・吉見俊哉（編著）、pp. 163-190、有斐閣。

2007b　「やおい論、明日のためにその２。」『ユリイカ 12 月臨時増刊号――BL スタディーズ』pp. 48-54、青土社。

コミックマーケット準備会・コンテンツ研究チーム

2011　「コミックマーケット 35 周年調査　調査報告」https://www.comiket.co.jp/info-a/C81/C81Ctlg35AnqReprot.pdf、2019 年 11 月 14 日閲覧。

小山　友介

2013　「初音ミク――N 次創作が拓く新しい世界」『システム / 制御 / 情報』57(5): 189-194。

サーモン、キャスリン・サイモンズ、ドナルド

2004　『女だけが楽しむ「ポルノ」の秘密』竹内久美子（訳）、新潮社（Salmon, Catherine & Symons, Donald 2001 WARRIOR LOVERS: Erotic Fiction, Evolution and Female Sexuality. Weidenfeld & Nicolson.）。

中島　梓

1995　『コミュニケーション不全症候群』（ちくま文庫）、筑摩書房。

2005　『タナトスの子供たち――過剰適応の生態学』（ちくま文庫）筑摩書房。

名藤　多香子

2007　「『二次創作』活動とそのネットワークについて」『それぞれのファン研究――I am a fan』東園子・岡井崇之・小林義寛ほか（著）、pp. 55-117、風塵社。

ペンリー、コンスタンス

1998　『NASA/トレック――女が宇宙を書きかえる』上野直子（訳）、工作舎（Penly, Constance 1997　NASA/TREK: Popular Science and Sex in America.Verso.）。

溝口　彰子

2000　「ホモフォビックなホモ、愛ゆえのレイプ、そしてクィアなレズビアン――最近のやおいテキストを分析する」『QUEER JAPAN』2: 193-211。

村瀬　ひろみ

2003　「オタクというオーディエンス」『テレビはどう見られてきたのか――テレビ・オーディエンスのいる風景テレビはどう見られてきたのか』小林直毅・毛利嘉孝（編）、pp. 133-152、せりか書房。

山岡　重行

2016　『腐女子の心理学――彼女たちはなぜ BL（男性同性愛）を好むのか?』福村出版。

（英語文献）
Kinsella, Sharon
2000 *Adult Manga: Culture and Power in Contemporary Japanese Society.* Curzon Press.